熊本保健科学大学
週刊 NEWSLETTER
2022.12.16
第 177号
発行 入試・広報課

愛情込め清掃…学生と心通わせ20年

学内清掃を請け負う熊本市の清掃管理会社「三勢」の従業員井本ミヨ子さん（78）は、2003年の開学以来、約20年にわたって学生や教職員を見守ってきました。「あっけらかんとした性格」で、誰とでも気さくに心を通わす井本さん。孫と同じ年ごろの学生たちからは、親しみを込めて「井本のおばちゃん」と呼ばれています。

「井本のおばちゃん」 欠かさぬ気配り 花一輪

（株）三勢従業員
井本ミヨ子さん（78）

毎日午前７時半に出勤する井本さんの１日は、１号館にある５カ所のトイレ清掃から始まります。それが終わると、同僚と手分けして同館内の各教室を回ります。終業の午後４時まで「目が回るぐらい忙しい」そうですが、この20年間、毎週月曜には各トイレに季節の花を飾って回ります。「花一輪ほどの温かさで、みんなが少しでも穏やかになれば」との心づくしです。

そんな優しさが、若い学生たちをひきつけます。言葉を交わすうちに親密になり、卒業時には抱き合って別れを惜しむという学生も少なくありません。卒業後、会いに来てくれる卒業生もいるそうです。本学の学生について、「いつの時代も礼儀正しくて、孫のよう」と目を細めます。

仕事を離れたら、登山、刺しゅう、花作り、スポーツ観戦と多彩な趣味を楽しんでいます。特に登山は、夫の正満さん（84）と共に北海道から九州まで「名山」と言われる山に登り続けています。本学の先生方とグループを組んで登っていた時期もあります。おかげで、「病院知らず」と健康そのもの。大学を陰で支える仕事への誇りとともに、「少なくとも80歳までは仕事も続けたい」と、笑顔で話していました。

（NL編集班）

写真上は「本学の学生さんは礼儀正しい」と語る井本さん。同中は井本さんが毎週月曜日にトイレに飾る花瓶。同下は仕事の合間に学生と談笑する井本さん

専門講座　日本には３大学のみ

「高品質」「高精度」に向け仕組み構築

医薬産業におけるアウトプットは製品としての「医薬品」であり、その有効性や安全性を裏付けるデータに精度や信頼性が求められます、また臨床検査におけるアウトプットは患者様の健康状態や疾病の状態を示す各種の検査値などのデータです。

これら品質や精度を保証するためには、個々の製造プロセスや検査の工程を確実にするだけではなく、恒常的に高品質の医薬品や、高精度の検査データを提供するためにはそのための仕組みを構築することが重要とされています。

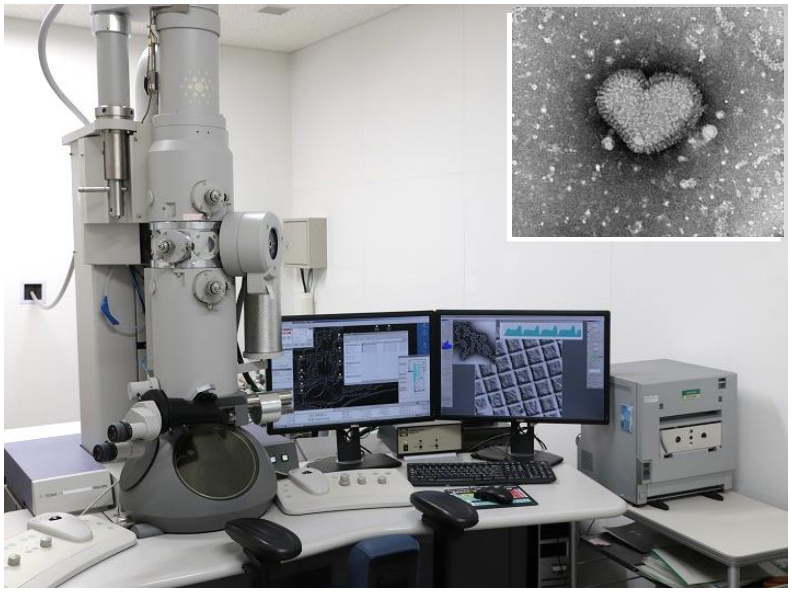
「品質保証・精度管理学共同研究講座」はこれらを研究・教育することを目的として2020年10月1日に設立された比較的新しい講座です。また品質保証や精度管理を専門とする講座は日本でも本学を含めて３大学にしかありません。

本講座においては、高品質の医薬品や、高精度の検査データを恒常的に提供するため、個々の製造や検査のプロセス、及びそれらを確実にするための仕組みを中心に研究を進めるともに、東京理科大学、富山大学等のアカデミアや、国や県の行政機関、協会団体等とも連携してオールジャパン体制のもとニーズに沿いながらもアカデミアの特性を生かした研究を推進しています。

また教育においては、本学の修士課程の学生を対象の講義に加えて、講座の希少性を生かして崇城大学や熊本大学、山口東京理科大等の近隣の大学での講義や、企業や行政の担当者を対象とした研修会等をとおして、地域への貢献活動も進めています。（品質保証・精度管理学共同研究講座　蛭田修特命教授）

製薬企業の品質担当者と打ち合わせをする蛭田特命教授

化血研から電子顕微鏡の寄贈



化血研から寄贈された電子顕微鏡。右上は電子顕微鏡で見たハート型のインフルエンザウイルス

本学の研究の幅を広げるため、化血研より電子顕微鏡＝写真＝の寄付がありました。本学1314顕微鏡室に設置されています。

今回寄贈された電子顕微鏡は、2004年から使用されているアメリカ製で、９月に搬入されました。光学顕微鏡では見えない１ミリメートルの100万分の１である１㎚（ナノメートル）の大きさのものも見ることができます。

ただ、取り扱いには専門的な技術が必要なため、40年前からこの顕微鏡を扱っている西村伸一郎氏も化血研から生物毒素・抗毒素共同研究講座に研究員として出向してきました。（安部悠介）

「熊保大の魅力は？」

4年生5人 学長と対談

対談する竹屋学長（中央）と学生たち

学科・専攻の４年生５人が11月28日（月）学長室を訪問し、竹屋元裕学長と対談しました。これは、本学広報誌「ぎんきょう」47号のメイン記事「学長室訪問（仮題）」のために企画されたものです。

訪問したのは、大塚瑞希さん（医学検査学科）、嶋村優里さん（看護学科）、山内佑介さん（リハビリテーション学科理学療法学専攻）、山崎友哉さん（同生活機能療法学専攻）、丸山愉貴さん（同言語聴覚学専攻）です。

竹屋学長が「大学は将来の設計図を描くところ」と切り出すと、学生たちはそれぞれが抱く夢を語り、大学生活を振り返りました。また、コロナ禍の影響下で「ネット環境を求めて実家を出た」「十分に実習を経験できないという人も出ていた」といった苦労話も。一方で、「先生との距離が近い」「施設、設備が整っている」と本学の魅力も語っていました。

約１時間半にわたった対談の詳報は、１月末に発行される「ぎんきょう」47号に掲載予定です。（NL編集班）

大学コンソーシアム熊本

二の丸広場で清掃活動

大学コンソーシアム熊本による熊本城二の丸広場一帯の清掃が４日(日)行われ、６大学の約50名がさわやかな汗を流しました。

初参加の１年生が、先輩たちの動きを見て声を掛け合い、協力し合う光景も見られ、短い時間の中、お互いに交流を深めていました。観光名所である熊本城の美化に貢献することができ、参加した学生全員が清々しい気持ちになり、最後はお城を背に集合写真におさまりました。＝**写真**

このような活動は、社会や地域への貢献はもちろんですが、自己成長にもつながると思います。新たな出会いや発見があったり、社会の抱える課題と向き合えたりなど、とても価値のある経験をすることができます。活動を通して得られる気づきは将来の自分にとって大きな財産となると思います。これからも多くの学生の皆さんの参加を期待します。

（医学検査学科１年・前田茉穂）

銀杏アラカルト

模擬授業を受講する御船高生

◆御船高校生が本学訪問　御船高校の１年生13人が、16日（火）本学を訪れ、リハビリテーション学科理学療法学専攻を中心に学内見学や模擬授業に参加しました。入試・広報課による大学概要についての説明を受けた後、２号館施設を見学、同専攻の田中貴士講師による模擬授業を受講しました。模擬授業では、生徒たちから興味深い質問も飛び出していました。御船高校の皆さま、ご来学ありがとうございました。

（入試・広報課）

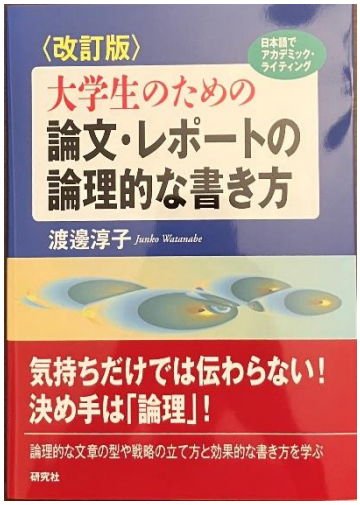
『改訂版　大学生のための論文・レポートの論理的な書き方』

渡邊　淳子著

アカデミックスキル支援センターの渡邊淳子准教授が『改訂版　大学生のための論文・レポートの論理的な書き方』を研究社から出版しました。2015年に著した『大学生のための論文・レポートの論理的な書き方』を改訂したもので、新版では要約に関する章を新たに加えています。

レポートや論文といった論証型文章の基本的な構成から、「わかりやすい文」の作り方、「何をどう書くか」といった構想段階での作業、文献引用の方法など、豊富な例文を使って説き起こしています。全９章から成る「改訂版」では、文献要約のコツと文章への取り込み方を加えました。

前著は2015年の発刊以来、増刷（第９刷）を重ねてきました。大学だけでなく高校でもライティング教材として使っているところがあるということです。渡邊准教授は「改訂版の話をいただいただけでも光栄なのに、出版後すぐ重版の知らせまで届き驚いています。自身の経験から『書くことが苦手』という人を想定した本なので、いろんな人に活用していただけたらうれしいです」と話しています。（A５判、116ページ、税込1,430円）



私の秘話☆ヒストリー

妹のオルゴール

看護学科　川口 弥恵子准教授

私が小学生、5つ年下の妹が幼稚園の頃の話。私は、その年のクリスマスプレゼントに妹がもらったオルゴールがとてもうらやましかった。キラキラした箱のフタを開けると中に５cmほどのバレリーナ姿の人形が格納されていて、それをガラスの面に立てると、「エリーゼのために」に合わせて人形が回るのである。妹は自慢するようにオルゴールのフタを開けてはバレリーナをクルクルさせていた。

妹と私は子供部屋の２段ベッドに寝ていた。ある夜、私はなかなか寝つけなかった。ふと妹のオルゴールが目にとまり、私はベッドから抜け出しオルゴールを手にとってそっとふたを開けた。暗闇の静寂の中で突然、「エリーゼのために」が鳴り響いた。同時に隣のリビングから「〇〇（妹の名前）まだ起きとるとね？」と母の怒鳴り声がした。私は体が固まった。すると驚いたことに、妹が寝言で「はーい」と返事したではないか！　私は慌てて布団の中に潜り込んだ。

次の日、妹は母から遅くまで起きていたことを怒られていた。妹は寝ていたと言い張っていたが、私は事実をとうとう言い出せなかった。

妹も母もそんな昔のことはとっくに忘れてしまっているだろうが、私はこの時期が来るといつも思い出して心のすみっこがチクッとする。皆さんもそんな小さな頃の思い出ありませんか？　☆Merry Christmas☆

「老後の自宅生活継続のための準備状況」調査にご協力を

自宅でのより良い老後生活継続に向けた医療専門職の関わり方を探っている岩下佳弘准教授（リハビリテーション学科理学療法学専攻）の研究チームが、40歳以上の成人を対象としたアンケート調査への協力を呼び掛けています。

「老後の自宅生活継続のための準備状況の調査」と題した調査はインターネットを利用して無記名方式で実施。Googleフォームを活用し、回答時間は約10分程度を想定しています。ご協力いただける方は、右側のQRコードからアンケートに入り、ご回答願います。問い合わせは岩下准教授☎096-275-2140（直通）・メール：yiwasita@kumamoto-hsu.ac.jpまで。

（NL編集班）

本学に安全功労者表彰　日頃の防災活動を評価

田嶋副知事から表彰状を受け取る
竹屋学長

熊本県消防関係知事表彰式が10日（土）、人吉市カルチャーパレスで実施され、本学が安全功労者表彰（団体）を受賞しました。当日は安全功労者表彰を受けた４団体すべてが式典に参加し、本学からは竹屋元裕学長、楢原真二副学長が出席しました。表彰式では、田嶋徹熊本県副知事より竹屋学長に賞状が手渡されました。

主な受賞理由は、学生に対して減災型地域社会のリーダー養成プログラムで毎年多くの認定者を出していることや、熊本地震や県南部の水害の際に多くの学生がボランティアに参加していることです。また、定期的に消防訓練や震災対策訓練を実施していることも評価されました。（入試・広報課）

私のお薦め記事

（このコーナーはDive! LSP１年生が担当しました）

ドローン 薬を運べ／岐阜薬大　実験成功
被災地想定 薬局車同士で受け渡し

（『切り抜き速報　医療と安全管理総集版』2021年12号、p.116）

概要

岐阜薬科大は大災害で薬局機能を搭載した複数台の車を出動した際に必要な医薬品を空輸できるかドローンを使って実験した。実験はドローンの位置情報や撮影した映像を共有できるシステムを開発したリアルグローブと共同実施した。担当した林秀樹教授は「実験の有用性を証明し、被災地で使えるようにしたい」と話した。

（医学検査学科・西村萌花）

コメント

いち早く薬を届けたくても、車の場合はどうしても時間がかかってしまう。また、届けられる場所も限られてくる。しかし、ドローンを使って空輸することで、時間は短縮できるし届けられる範囲も広がると思う。日本は自然災害が多い国である。いつどこでどのような災害が起こるか分からない。だから、全国各地でドローンを使用した空輸を発展させてほしい。（リハビリテーション学科生活機能療法学専攻・山本涼葉）